

聖書：Iサムエル19：1～24

説教題：神は私のとりで

日時：2016年11月13日（夕拝）

この19章でサウル王のダビデに対する妬みの感情はより大きく、より深く、より強くなっていることが見られます。前の18章で彼の殺意はサウル王本人の胸の中にだけ秘められていました。彼はダビデを戦場に送り出して、ひそかに彼を殺そうとしました。しかしこの19章で彼の行動は新しい段階に入ります。1節前半：「サウルは、ダビデを殺すことを、息子ヨナタンや家来の全部に告げた。」 サウルはここでダビデ殺害の思いを家族と家来の者に公表しました！罪は小さい内に解決・処理しないと、どんどん大きくなります。彼は18章で色々なことを試みて、すべて裏目に出ました。その時点で悟って思いとどまることもできました。しかしここで一線を越えてしまいます。私たちも人に妬みを持つことがあるものです。そして普段の自分では考えても見なかった残酷な思いが出て来たりするものです。しかしそれを解決しないで放置しておく、この章のサウルのようにになってしまう。いつのまにか自分でもコントロールできない憎しみや敵意の思いに支配され、後戻りができなくなり、一層の悪へ突っ走ってしまうのです。

サウルはここで一旦、息子ヨナタンの言葉によって静められます。ヨナタンはダビデを非常に愛しており、父サウルに、罪を犯さないように説得します。サウルはそれを聞き入れ、6節で「主は生きておられる。あれは殺されることはない。」と誓います。この結果、ダビデはサウルの前に再び出て、以前のように仕える生活が始まります。しかし、この状態は長続きしません。ダビデはペリシテ人との戦いで再び成功を収めます。するとサウルは嫉妬心に再び火がつきます。そして「あれは殺されることはない。」と主にかけて誓ったはずなのに、またダビデ殺害の行動に出始めるのです。

まず最初の試みは10節の槍です。サウルは琴を弾いてくれているダビデめがけて、手にしていた槍を投げ付け、壁に突き刺そうとします。以前も同じことをしましたが、今回も失敗。ダビデも今度ばかりは、サウルが本当に自分を殺そうとしていることを知り、逃げて行きます。ここからサムエル記におけるダビデの逃亡生活が始まります。

2つ目の試みとしてサウルは11節からのところで、ダビデの家に使者を遣わします。娘ミカルと一緒にいるところを捕まえようとしています。しかしミカルは前の晩にそれを知

って、ダビデを窓から逃しました。そしてサウルの使者が捕まえにやって来た時、テラフィムを取ってダビデが病気で寝ているかのように見せかけました。このため、サウルから遣わされた使者たちは欺かれてしまい、サウルはダビデを遠くへ逃してしまう結果となります。またしても失敗です。

三つ目のことは 18 節からのところに書いてあります。ダビデはサムエルのところへ逃げて行き、サムエルとナヨテに行って住んだとあります。しかし全国にはサウル王に組する密告者がいたのでしょう。「ダビデはナヨテにいます！」との知らせが告げられます。ダビデにとっては大ピンチです。しかしそこで不思議なことが起こります。サウルは自分のところから使者を 3 回も遣わすも、彼らはサムエルが指導する預言者の一団に出会った時、一緒に預言し始めてしまいます。逮捕しに出かけたのに、一緒に礼拝集団にとり込まれてしまい、恍惚状態に陥って任務を遂行できない。サウルにとっては、「一体何をやっているのか！」というところでしょう。そこで最後に彼自身が出かけます。するとどうでしょう。23 節を見ると、サウルもまた預言する羽目になってしまいます。しかも彼の場合、ナヨテにたどり着く前からそうになってしまい、預言しながら歩いてナヨテの町に入っていきます。さらに 24 節では、着物を脱いでサムエルの前で預言してしまいます。自分から去って行ったサムエルを久しぶりに前にしているのに、なぜか着物を脱ぎ始めてしまい、話したい言葉も話せず、ただ預言するのみ。あげくの果てに、一昼夜、裸のままそこに倒れていた。一体これは何でしょうか。これはサウルのしようとすることに対する神の妨害でしょう。サウルは目的を達成できなかったばかりか、王としてはあまりに恥ずかしい姿を一昼夜露呈せざるを得なくなった。そしてこの現象ゆえに民衆から「サウルもまた預言者のひとりなのか。」と言われるようになったとあります。明らかにこれは皮肉的な注釈です。

サウルはこのことを通して知るべきでした。自分はダビデを追いかけて、殺そうとしているが、神がその行く手をふさいでいる。自分は神と敵対し、神と戦うようなことをしている。ある学者はこのサウルの経験は、彼に対する恵み深い警告だと言っています。確かに神はここでサウルを滅ぼしていません。恥ずかしく情けない目に会わせましたが、これは彼に対するメッセージです。果たしてサウルはここから学んで悔い改めに向かうのでしょうか。それともなお悪へと突っ走るのでしょうか。

私たちもここから学ぶべきでしょう。妬みに駆られて誰かをおとしめようとする時、

実は私たちは神を敵としているということを。私たちは陰でその人の悪口を言ったり、自分が持っている力、立場、方法、知恵によって、相手が穴に落ち込むのを手助けしようとするかも知れません。しかしそういう試みに対しては神が邪魔されるのです。神が壊されるのです。ですから私たちはこの章のサウルの姿を見て、妬みの生活に進むことをやめたいのです。そうではなく、神に信頼し、神がくださる祝福こそを待ち望む生活をしたいです。神はご自身の子ら一人一人に最善の計画を持っていて下さいます。人と比較して嫉妬する生活ではなく、神が私に定め、備えている祝福を待ち望んで、神に喜ばれる歩みこそを願い求めて行きたいのです。

さてここまではサウルに注目して来ましたが、もう一方のダビデに注目することによっても、私たちは大切なことを学ぶことができます。ダビデは今日の箇所から命を狙われる逃亡生活が始まります。これは彼が何か悪いことをしたからではありません。ここに神と正しい関係にあるクリスチャンでも、こういう苦難に巻き込まれることがあり得るということを学びます。ダビデは次の 20 章 1 節でこう言っています。「私がどんなことをし、私にどんな咎があり、私があなたの父上に対してどんな罪を犯したというので、父上は私のいのちを求めておられるのでしょうか。」 彼はそのように潔白です。なのに突然槍を投げ付けられ、家には使者が遣わされて待ち伏せされ、またナヨテに逃げても、追っ手が追いかけて来る。神は果たして共にいて下さっているのでしょうか。

しかし実はこの 19 章が声を大にして語っているメッセージは、この非常に厳しい状況にあるダビデと神は共におられて、彼を守っておられたということではないでしょうか。人間の目で見るとサウルが優勢です。一般的に言えば、追われる者より追う者の方が強く見えます。しかしサウルの試みはことごとく挫折させられています。私たちがここに見るのは、神の守りは物事がうまく行っていない逆境のただ中にもある！ということ。神が共におられる証拠は、困難なことが少ないということに見出されるわけではありません。むしろ厳しい状況の中でも、私たちがそこでなお立ち続けていること、その中でなお守られているという事実を示されるのです。Ⅱコリント 4 章 8～9 節：「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」 ですから私たちは困難にある時、そのことで神への信頼を失ってしまってはならないのです。そこでガッカリし、神を見失ったら、生きる力も希望もなくなります。しかし今日の 19 章のように、神はどこにおられるのか

と思われるような厳しい中でも、実は神はダビデと共におられ、彼と一緒に歩いて下さってました。それゆえ私たちはどんな状況にあっても、そこにも共にいて下さる神を見上げて心を強くし、この方の救いを待ち望む歩みをするようにと励まされるのです。

詩篇 59 篇を参照したいと思います。表題を見ると分かりますように、この詩篇はまさに、今日のサムエル記 19 章の時のことを歌った詩篇です。3 節から 4 節前半に「今や、彼らは私のいのちを取ろうと、待ち伏せています。力ある者どもが、私に襲いかかろうとしています。主よ。それは私のそむきの罪のためでもなく、私の罪のためでもありません。私には、咎がないのに、彼らは走り回り、身を構えているのです。」とあります。6 節 7 節にも敵の行動が描かれています。その中でダビデはどのような信仰に生きていたでしょうか。8 節と 9 節：「しかし主よ。あなたは、彼らを笑い、すべての国々を、あざけられます。私の力、あなたを私は、見守ります。神は私のとりでです。」ダビデはこの苦難の中で、主はここにおられないと不満を述べるのではなく、力強い私の力、私のとりでが、私を守っていてくださる！と告白しています。14 節 15 節にも同じように敵の行動が記されています。そしてこの詩篇の結論となる告白が 16～17 節にこのように述べられています。「しかし、この私は、あなたの力を歌います。まことに、朝明けには、あなたの恵みを喜び歌います。それは、私の苦しみの日、あなたは私のとりで、また、私の逃げ場であられたからです。私の力、あなたに、私はほめ歌を歌います。神は私のとりで、私の恵みの神であられます。」ダビデは敵に追いかけられ、囲まれるような状況の中で、逃げ場はないと考えるのではなく、力強い主の御手に逃げ込むことができた。「主こそ苦しみの日にとりで、私の逃げ場」と彼は言っています。そこで彼は安らぎ、慰められ、力を回復し、主の守りの中を進んで行ったのです。

しかしある人はこう考えるかもしれません。これはダビデには当てはまっても、私には当てはまらないのではないかと。ダビデは今後イスラエルの王となる大事な器であるが、私はただの一介の信徒である。とてもダビデと同列には考えられないのではないかと。しかしこのように考えてみたら良いのではないかと思います。このダビデはやがて神が送って下さる真の王、メシヤを指し示す器でした。そして後に来られたメシヤであるイエス様も様々な困難や危険の中に置かれました。生まれた直後からヘロデ大王に命を狙われてエジプトへ逃げなければならませんでしたし、公の生涯でも人々から拒絶され、崖から落とされそうになったこともありました。敵対者たちから様々な罠を仕掛けられ、何度も手をかけられそうになりました。そういう中で、イエス様も神によって常に守ら

れましたし、イエス様自身もそのことを確信して歩まれました。色々な状況の中で、これでは神の守りはどこにあるのかなどと言っとうろたえることをせず、力強い神の御手が常にご自身の上にあることを信じ、それゆえに神の計画が成就する前に突然自分のいのちが取られることはないことを確信し、平安であられました。

しかしダビデとイエス様はこのように神によって守られたが、私たちの場合はそうではないと言ったら、おかしいことになります。なぜなら神がイエス様を地上に送り、その生涯を導かれたのは他ならぬ私たちの救いのためだったからです。ですから神は私たちを、ダビデやイエス様に劣ることのない深い愛と関心を持って導いてくださっているのです。こう言っても良いと思います。神はイエス様をご自身の愛する子として特別に守られました。しかし今や私たちはイエス様と結ばれて、イエス様と同じ神の子どもという立場・身分に入れて頂いています。であるなら神は私たち一人一人の生活の上にも、同じように深いご自身の愛のまなざしを注ぎ、またその全能の御手を働かせて、最善のご計画に沿って導いてくださっているのではないのでしょうか。

ですから私たちも、今日の章のダビデのように、また詩篇 59 篇のダビデのように、一見思わしくない状況にあっても、この神を見失わないでいたいと思います。ダビデは朝明けに歌いました。あなたは苦しみの時の私のとりで。私の逃げ場。私の力。私の恵みの神！と。そのように私たちも告白して、神に慰められ、強められ、力を与えられて、神に従う歩みへ進みたいと思います。そして私たちの思いを超える仕方で私たちを守り、助け出してくださる神の力と導きを体験して、神をほめたたえる歩みへ進みたいと思います。